第二期　第百二十二号　（初版）（無料）

音信不通　本のビオトープ

学びあう人々のために

2026.09.10　定有堂書店　発行

人を見つける　奈良 敏行
四〇年ぶりにW・ジェイムズとJ・デューイを読んだ　岩田 直樹
「本のある場所」日記　二〇二六年七月　南陀楼綾繁
あいだの日記　鳥居 貴彦
The Perfect Reminder　髙木 善祥
日々是雑言（ぞうごん）20　萩原 俊郎
高粱にて。　板野 円香
納車　おぎはらきえ
振り出しに戻る　三浦 永理
イーハトーブ　堀内 菜摘
本を作る側から（42）　村瀬 謙介
論語について（16）　小原 修治
67（シクスティセブン）　古賀 啓三
人形愛…ふたたび　ムラカミヒロミ
ライブ　あきの素生
後書き　ドラメリア

人を見つける

奈良 敏行
（定有堂 主人）

日頃、言葉を見つけるのを主眼に本を読んでいる。見つけた言葉は、ナラティブを切り替えてくれる。記憶は言葉がつくるもので、必ずしも現実に着地していない。そうであれば、言葉が玉突きのように記憶を構成し直すナラティブは、わたしにとっては救いの形式だ。長く生きていると、記憶に押しつぶされそうになることが、頻繁にある。一人でクルマを運転しているとき、そんな記憶がせりあがってくる。少し声を出す。叫んでみる。

「世界」は自分がつくるものだ。自分の環世界だ。もしそれが「言葉」でつくられているのなら、この「世界」の緊縛性を解き放つ「言葉」との出合いがあるはずだ。その刹那は本を読むことの中にある。

「言葉を見つける」のは祈りにも似た行為だ。それを信じてそのように生きている。しかし、「人を見つける」のも楽しいのではないか。ふり返ってみればそのようにして

生きてきたのではなかったか。自分を正気づけるのは言葉だが、「世界」と「世界」の相互主観性の中にこそ、救いはあったのではないか。「言葉」を探し、「人」を探す、それが緊縛性からの解き放ち、つまり自由の発見だったのではないか。

先日、定有堂教室の読書会のメンバーが、「ひとり本屋」プロジェクトを構想していると口にした。いまの仕事は変わらず継続し、週末だけ店開きするという。くわしくはまだうかがっていない。でも、書店→本屋という継走の先に続くものは、「ひとり本屋」という「世界」なのではないかと予感する。

そんな話を家人にしたら、「人間は本屋という営みを超えている」と蒙を啓く言葉をくれた。「本屋」的自由を獲得するためには、身の丈以上の余計なものを背負いすぎていると気づく必要がある。小回りがきくのが利点だが、小回りというのは未来を先取りして環世界を小さくすることだ。

しかし、手放して書店が本屋になるのが難しいように、本屋が「ひとり本屋」になるのは難しい。初期設定が違うからだ。本屋の初期設定は「小商い」だ。

同じ読書会の啓三さんは、わたしが「小商い」という言葉の限界で思考停止しているその場所に、「表現行為」という言葉を投げかけてくれた。啓三さんは又従兄弟で、美術の学びをきっかけにアメリカに渡って永住している。しかし、わたしの「小商い」同様その世界は緊縛性のもと一つの「世界」として封印されている。いまは言葉のもたらす開示する力に驚きを感じ続けている。見たものを定着する営みよりも、言葉のナラティブに可能性と喜びを見出している。

その啓三さんの「世界」の緊縛性を打ち破ったのが、娘さんの「パフォーマンス・アート」だ。頭脳の表現ではなく、身体性の表現だ。その「表現行為」は「My New House」に代表される。アートは「ある瞬間」を生み出すのだ。プロセスの重視だ。「ひとり本屋」は小回りのきく「小商い」ではなく、存在を「花」させる、つまり「事件」という「世界」を開示させる方法と発見なのだ。「ひとり本屋」は「小商い」ではなく「表現行為」、次元の異なる初発衝動、オブセッションの別名だ。

衝動とオブセッションを入口にした本に最近出合った。谷川嘉浩『人生のレールを外れる衝動の見つけ方』だ。衝動に憑依され、それを行為に移すと偏愛が生まれる、という話だ。この偏愛をどのように飼い慣らすかの追求だ。「ひとり本屋」もこの偏愛の世界なのだと思う。教育というレールを次のように語る。

《外在的アプローチは、当事者の願望や欲望を無視します。つまり外在的アプローチによって人を動かそうとするシステムは、偏愛や衝動を抑圧した上に成立するものなのです。》

これはディシプリンといわれるものだ。規律訓練のことだ。立花隆の『青春漂流』に猿回し調教師の話がある。「猿は命令されてその通りにやるということに、徹底的に抵抗する」という。調教（教育）とは抵抗心の根っこを切ることとなる。これを「根切り」という。

「根切り」を拒否したところに抵抗としての「初発衝動」がある。それは偏愛という姿をとる。

「ひとり本屋」は異形の営みだ。ディシプリン、根切りを拒否し、自分の「偏愛」を守り通す。全く別の動機を初期設定として持っている。本屋を縮減したが、わたしにできなかった「ひとり本屋」、わたしの関心はそんなところに向かっている。

2026. 08. 04

谷川嘉浩『人生のレールを外れる衝動の見つけ方』ちくまプリマー新書 2024

立花隆の『青春漂流』講談社文庫 1988

鈴木暁彦・安藤隆一　著
『活字を友とする人と本屋と図書館の物語』
日外アソシエーツ　刊行　2026

鈴木暁彦さんは元朝日新聞鳥取支局員。現在長崎県立大学教授。安藤隆一さんは元「スペース」発行人。元鳥取県立公文書館館長。
・定有堂書店・今井書店・鳥取県立図書館の順に語られています。
永井伸和さんの「今井書店」の歴史の決定版。大変な労作です。

板野円香　編著『認知症ハンドブック』
サエラ薬局 2026

・板野さんは定有堂教室「読書室ビオトープ」の仲間。本業は「サエラ薬局」の薬剤師。文学フリマに自作の小説を出品するなど。マルチの活躍。若い人なのに「認知症」に取り組めたのが驚き。内容は専門領域の啓蒙なのですが、簡単明快な説明と図解など「本」というメディアの可能性をあますところなく展開。本作りの参考にもなる秀作。

四〇年ぶりにW・ジェイムズとJ・デューイを読んだ

岩田　直樹
（再解釈本舗・「読む会」講師）

前回に引き続いて、プラグマティズムについて。といっても、実につまらない思い出話である。

一昨年の秋から、文献蒐集・執筆と福本和夫論（定有堂ホームページに二六回連載、近日刊行予定）にかかりきりだったため、新しい哲学・思想をほとんど勉強していなかった。奈良さんに触発されて「プラグマティズムを読もう」と思い立ったとき、久しぶりに心が躍る気がした。知的好奇心が刺激されたのだ。プラグマティズムは初見のはずだった。

人生ふた回り目になると誰でも経験値が高まり、「初めて」ということが少なくなってくる。記憶の奥底をじっくりゴソゴソ浚っていると、大昔に何冊か読んだことを思い出した。

およそ四〇年前、大学の教育学部に通っていた時期がある。教員養成系ではなく（年齢が少し下の同級生一一人のうち教員になったのは私だけ）、教育学を学ぶことになっていた。年度当初の講義だったか、「そもそも教育学とは何か」と大真面目で議論されている。

理学部にいたこともあり、この議論に何の意味があるのかさっぱりわからない。「物理学とは何か」といった不思議な問いかけに出くわしたことがなかったからだ。学問は守備範囲が予め定まっているからこそ学問なのであって、「そもそも」論は不毛である。そう決めつけていた。（少し後になって、「哲学とは何か」という問いかけが至極真っ当であることに気づくようになる。）

教育学部に入ったのは二つの目的があった。現場での教育実習を経て教員免許（数学と社会）を取得すること、そして文学部で哲学（現象学など）の講義を聴講すること。哲学を学びたいのであれば文学部哲学科に所属するのが近道だ。しかし第三外国語としてギリシア語あるいはラテン語の単位が必要で、第二外国語までしか単位を取っていない者には学部進学は無理であった。

私の所属は教育哲学・教育史コースである。プラトン『国家』、ルソー『エミール』などの他に、ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論』をゼミで読んだりもした。さすがにハーバーマスは難解で何を言っているのかチンプンカンプンだった。もちろんデューイ『学校と社会』『民主主義と教育』は必読である。

現象学を読みたいと思っていた私は、文学部で現代哲

学などの講義を聴くとともに、フッサールと同時代人の西田幾多郎、アンリ・ベルクソン、ウィリアム・ジェイムズらの著作を少しずつ読み進めていた。『善の研究』『創造的進化』『根源的経験論』などである。

デューイは教育哲学者、ジェイムズは現象学者、と皮相な理解で満足していた私は、二人の間に共通項はないと考えていた。

ところが、である。日本橋の丸善に行って棚を眺めていると、ジェイムズ『プラグマティズム』、デューイ『哲学の改造』と目が合った。早速、この二冊を読む。どうやらジェイムズとデューイは新しい哲学を提唱しているらしい。プラグマティズムには一向に興味を持てず、それ以降、アプローチしたことはない。

ここまでが記憶の薄暗がりからかろうじて拾い集めてきた断片である。

八月上旬に福本和夫論初稿の校正が終わり、いよいよプラグマティズムの勉強に取りかかろうとして、『プラグマティズム』『哲学の改造』を探すことにした。

最大で三世代七人が暮らしていた我が家は、今や二人暮らしである(人口減少率七一%!)。数年前から「ここは自分の部屋」と二人による「国盗り物語」状態に陥った。仏間(客間)とお客さん用の寝室以外に本をあちこちに置いている。探し物がなかなか見つからない。

結局、岩波文庫の『プラグマティズム』はアマゾンで注文した。読了後に、ようやく『哲学の改造』を本棚の奥から救出する。手書きのコメントや傍線が随所にあり、それらを拾い読むだけでも知識のまとめになる。

巻末の解説を読んでいたとき、「あっ」と思い出した。そうだ、丸善で購入したのは二冊とも英語版だった。受験英語に毛の生えた程度で無謀にも哲学書に挑戦したのだった。『プラグマティズム』を息も絶え絶えで読み終えたとき、もはや『哲学の改造』を読む気力は残っていなかった。岩波文庫版をあわてて買いに行った。

てっきり、岩波文庫が二冊、と思い込んでいたのである。一週間かけても『プラグマティズム』の日本語版が姿を現わさないはずだ。

丹念に再捜索すると、『プラグマティズム』英語版はフッサールの棚のよく見える場所にあった。しかし、買ったはずの『哲学の改造』『民主主義と教育』『学校と社会』の英語版はどこにもない。

おーい、四〇年ぶりに出て来ないか。

「本のある場所」日記　二〇二六年七月

南陀楼綾繁
（ライター・編集者）

7月29日

ちょうど1年ぶりに『音信不通』に文章を書く。きっかけは、久しぶりに鳥取を訪れたことだ。雑誌『地域人』（その後休刊）の本屋特集で取材に来て以来だから、なんと7年ぶり。同じ山陰の出身だが、「ついで」に行くのが成り立たない遠さなのだ。今回は鳥取県図書館大会の講師として呼んでいただいた。

朝早くの飛行機で鳥取空港に着く。空港バスで県庁・日赤前で降りると、バス停のベンチに奈良敏行さんが座って待ってくれていた。「この中のレストランです」と目の前の建物を指さす。県民文化会館で、県立図書館も隣接している。まだ11時なので客は少ない。座ってランチを注文すると、7年間のブランクを感じさせずに、奈良さんは話しはじめる。鳥取の図書館や本屋の状況、取次との関係など。「朱喜哲さんの『バラバラな世界で共に生きる』（NHK出版新書）がね」などと最新の本の話題に、単語を拾いながら聴くのが精一杯だ。

途中、ドラメリアさんが合流し、ランチを食べながら言葉少なに過ごし、さっと去っていく。その後も奈良さんと話し、県立図書館の取材に向かうまで2時間その店にいた。今日は太極拳の練習の日だからトークには参加できないという奈良さんと、そこで別れる。「また『音信不通』に書いてください」と云ってくれたのが嬉しかった。

取材のあと、館長の「歩いてもすぐです」という言葉につられて、県立博物館まで歩きだすが、椎間板ヘルニアで歩行が困難なうえに大荷物、さらに炎天下という悪条件にすぐにグロッキーになり、堀端にある古民家の韓国カフェ〈一凛〉で冷たい柚子茶を飲む。県立博物館で「妖怪・幻獣づくし」展を観る。ツチノコについての章では、倉吉周辺に「ツチコロビ」と呼ばれる怪しい生き物がいたというのが面白い。痛い足を引きずりながら全部の展示を観終わり、迎えに来てくれたNPO本の学校の柴野京子さんと前田昇さんの理事長と副理事長のコンビ、そして今井書店の永井伸和さんと合流。

駅の反対側に、今年4月にできた本屋〈MEKURU〉へ。旧街道っぽい通りに面しており、道を挟んだところにある〈喫茶雲仙〉が気になる（この日は休み）。ここで関西からやってきた田中文夫さんと合流。本の学校など鳥取県の本の動きを見てきた人だ。壁と中央にある棚に新刊書が並ぶ。音楽や映画、コミュニティの本などが目に付く。棚を見ていたら常連らしい若者に「第一書房の本を集めているんで

す。この本、掘り出し物じゃないですか?」とスマホの写真を見せられる。ああ、珍しいんじゃないですか、と答えておく。だって他に答えようがないし。大澤絢子「「修養」の日本近代』(NHKブックス)を買う。

ホテルに荷物を置き、今日の会場となる〈SHEEPSHEEP BOOKS〉へ。とその前に私は近くのビルの2階の〈ボルゾイレコード〉へ。鳥取市に来たらココに寄らないと落ち着かない。名前を知らない店主とも馴染になった。昨年夏、金に困ってCDを数百枚処分してから新しいのは買わないようにしているので、古本の棚から『山之口貘詩文集』(講談社文芸文庫)を買う。

元は定有堂書店だったビルの横から2階に上がってSHEEPSHEEP BOOKSへ。イベント用に棚が寄せられて全体は見えないが、ジャンルごとに新刊と古本が同じ棚に差さっていい感じだ。店主の高木善祥さんとは今井書店時代にどこかで会っている。ひげ面で小さい声で話すのが芸術家っぽい(貧困な感想)。鳥取市の出版社「小取舎」の村瀬謙介さんも到着。会場は15人ほどで一杯に。懐かしい顔が見える一方で、大学生や高校生も来てくれていた。トークでは、若い二人を前にしてエラそうにならないよう気をつけるが、店に私が関わった本(『ミニコミ魂』『季刊・本とコンピュータ』)があったのでつい回顧モードになったのは許してほしい。

鳥取の本の状況については、出たばかりの鈴木暁彦・安藤隆一『活字を友とする人と本屋と図書館の物語』(日外アソシエーツ)にまとめられており、高木さん、村瀬さんも登場する。そして、安藤さんが1970年代後半から90年代まで発行したタウン誌『スペース』については、小取舎から出た『街を見る方法』に詳しい。トークで「いい本だけど、図版として『スペース』の表紙や本文を入れなかったのはなんで?」と村瀬さんに尋ねると、予想しなかった質問らしく絶句していた。関係者全員にその発想がなかったとのこと。なんだか判る。意外に当事者ってそうなりがちなんだよね。

打ち上げの居酒屋では、永井さんがおにぎりを頬張りながらも話が止まらず、12時近くまで。初日から濃厚だった。というワケで、この項、次号に続きます。

南陀楼綾繁 著
『本のある場所を訪ねて』
教育評論社
2026

あいだの日記

鳥居　貴彦

（開風社　待賢ブックセンター）

電話を取ると、「和歌山のイハラです～」と威勢のよい声が聞こえてくる。イハラさんはいつでも相変わらずすぎる。軽く近況報告などしたのちに「とり君は熊本に知り合いはないの」と聞かれる。何人かの顔が浮かぶがどうやらイハラさんの言いたいことは別にありそうだった。地震のあった日から熊本の友人たちのことは気になっていた。大学の同級生は出張で県外にいて家に帰れていないらしかった。知り合いの古本屋はSNSで無事を知った。なんとなく気になっているが連絡をとるわけでもなく多分無事だろうと思っているだけの人もいる。「うちも水害の時はいろんな人に助けてもらったからね」とイハラさんは言った。何かできることを探しているようだった。京都で、本屋が、できること。つぶやいてみるがつぶやいただけでそれ以上のことは何も起こらない。京都で、本屋が。

何年ぶりかに妻の実家にかえったら台風が直撃した。行きの飛行機は飛んだはいいが那覇空港に着陸してからゲートに着くまでの間に驚くほど揺れた。それでも飛行機を降りると到着ゲートの隣では出発便の準備が進んでいる。「この飛行機は鹿児島空港に着陸できなかった場合、羽田空港に行き先を変更します」と冷静な声でアナウンスが流れている。口調は冷静だが言ってることはむちゃくちゃだ。那覇から鹿児島に行こうと飛行機に乗って、羽田に運ばれちゃった人たちはその後どうするのだろうか。たどり着いたレンタカー屋さんのカウンターには誰もいなかった。スタッフすらいない。雨は降っていないが風は強い。高速にのると突然叩きつけるように雨が降り始める。急に止む。そして風。そのくりかえし。瞬間を切り取れば嵐だが、そうでもない時間の方が長い。道路にはいろんなものが落ちている。南の島の葉っぱはでかい。翌日には役所もスーパーもバスも全て動かなくなった。テレビの中では球児が太陽の下で野球をしているが、窓の外はいつまでたっても嵐。次の日になってもまだ暴風域に入ったままだった。どこそこのスーパーはまだ停電しているとか、ニュースにもならないような話がちびちびと聞こえてくる。恐る恐る外に出ると道端のバナナの木が倒れていた。道端にバナナが生えているだけでも情報が過多気

味なのだが、それが倒れていてしかも花が咲いているのだ。手に負えない。電気工事のトラックと何台もすれ違う。さいわい身内にも建物にも被害というほどの何かがあったわけではない。二日間引きこもって帰ってきた、というだけの夏休み。息子の自由研究は「台風の研究」に決まった。

募金のお願いと件名のついたメールがくる。ご協力は任意です、と強調されている。任意のご協力をお願いする前に黙って自分が動いたらどうかと思ってしまうのだが、世の中を動かす人というのはこういう人なのかもしれない。

他の場所に貼り出された紙には、いただいた善意は全額被災地に届けます、とかなんとか書いてある。全額、が気になってしまう。善意を届けることは無償でやらなければいけないことではない。あいだに入ることも立派な仕事だし、仕事には報酬が伴うものだ。そんなことすら忘れてしまうのは、「何円以上購入すると送料無料」とかいう世界に慣れ過ぎてしまっているからではないか。たとえ送料が無料になったとしても、運ぶ人も送る手間もなくなるわけではない。あいだに誰かが入ることで物事が動くのであればその人にはきちんとお礼をしたほうがいい。

ただ自分はどうかと言われると、あいだに入ることはよくあるし嫌いではないけれど、そこでお金を受け取ることは苦手だ。仕事にはならない。じゃあなにをやってるのかと聞かれるととても困る。ひととひとのあいだでただ遊んでいるだけなのかもしれない。

じつは四年生の夏休みの宿題をまだ出していない。もう三十年近くたってしまった。プリントはもう一度もらえるだろうか。きちんと宿題も自由研究も終わらせて二学期が始まった息子が学校から帰ってきた。近所の一年生の女の子が二人くっついている。話が合うのかどうか知らないがなにやら楽しそうだ。隙間なく三人で座ってなにかのゲームをしている。よくわからないし暑苦しそうだが大人があいだに入る余地はない。遠くから眺めておくことにする。

開風社待賢ブックセンター　080-3166-1385
〒602-8125
京都市上京区大宮通椹木町上る菱屋町８１８
http://www.kaifusha-books.com

The Perfect Reminder

髙木　善祥
（SHEEPSHEEP BOOKS）

七月三日、ＮＰＯ向けの勉強会に参加。助成団体の方の「困っているＮＰＯを助けるために助成金を出すのではなく、一緒に課題解決をしたいと思える団体を探している」というお話に、深くうなずく。潤沢な予算があるＮＰＯはほとんどなく、手弁当では活動の継続が危うい。かかわっている団体の目的や意図を丁寧に伝える方法を、相手によって少しずつ修正しながら実践していこう。

後半はファンドレイザーとして、各団体の個別相談を受ける。外国人の方々との共生、介護／福祉、兼業農家の課題など知らないことばかりで、逆に色々と教えていただく。

最初の自己紹介で普段は本屋をやっていると言うと「ＺＩＮＥを作りたくて」とか「地域の方々に聞き取りして、記録として残したくて」と、違う角度の相談もチラホラ出てくる。色々な側面から関われるのではと思う。

＊

七月四日、人生初のＤＪをやってみた。

六月に開催された「青谷音楽祭」のアフターパーティに関係者や出店者が集まるということで、お誘いいただいた。

事前にある程度選曲し、ゆるめの曲を三十分ほどかける。タブレットに無料のアプリを入れて曲を流す程度でたいしたことはやっていないが、友人たちから「良かったよ」と声をかけてもらったので、デビューとしては及第点としておこう。

＊

七月十一日、「地域の活字文化を考えるフォーラム」に登壇のため、とりぎん文化会館へ。車を降りたところで常連の方とバッタリ顔を合わせる。亡くなった友人の家族が蔵書の処分を考えていると相談を受け、後日連絡をいただくことになった。

図書館・本屋・古書・人とのつながり・文化の継承。活字文化について話す前という絶妙なタイミングで起きた偶然（必然？）。

＊

七月二十日、毎年のことだが店内がとても暑いので、念のため電気関係の仕事をされている方にエアコンをチェックしてもらうが、十年以上前の機種だが問題なく動いていると

のこと。家庭用でパワー不足のため、出力を上げようとすると電気工事から必要になってくるので、ひとまず現状維持とした。

代わりに遮光カーテンをつける。店内の室温はあまり下がっていないが、日差しが入ってこないだけでもかなり違う。ただし「普通の部屋」っぽくなってしまった。

＊

七月二十九日、南陀楼綾繁(なんだろうあやしげ)さんをお招きして、トークイベントを行った。最新刊の『本のある場所を訪ねて』(教育評論社)をもとに、小取舎の村瀬氏にも加わっていただき、私と二人でお話を伺うスタイル。出版／書店業界を長く取材されてきただけあって、のっけから濃い話で圧倒される。

著書に取り上げられたが閉店してしまった書店のこと、独立系書店とまちの本屋との違い、地方における出版社や出版活動の意義など、話題は多岐にわたった。

また「一箱古本市」の発案者でもあるので、その広がりについてもうかがった。話が尽きず予定時間を大幅に超えてしまったが、来場者には楽しんでもらえたようだ。

＊

マガジンハウスの雑誌『アンドプレミアム』に掲載してもらったことと、日本海新聞に月一回「潮流」を書いている影響か、七月はお客さんが多く昨年の倍近い売上だった。リピートしてもらうために、地道なルーティンを続けていく。

【参考文献】

『活字を友とする人と本屋と図書館の物語　鳥取を「図書館先進県」に変えた五〇年』鈴木暁彦・安藤隆一　日外アソシエーツ

書店・図書館・行政・読者、たくさんの関係者の努力で「鳥取モデル」が成り立っていることを丁寧にまとめた一冊。ウェブショップでも送料無料で販売中です。

『人にはどれほどの本がいるか』鈴木結生　朝日新聞出版

こんなタイトルなのに小説です。

定有堂ビル2階　古書・新刊の本屋
SHEEPSHEEP BOOKS　店主　髙木善祥

定有堂倉吉支店　90

日々是雑言(ぞうごん)　20

萩原　俊郎
（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

静かな日々

少ない年金を補ってくれたゲストハウスを人に譲り、古巣の会社の社史編纂の仕事もひと段落したので、時々取材に出かけてWEBサイトや経済誌に載っける在宅ワーク以外、とても静かな日々を送っている。

そういえば実家の書棚の世界文学全集の中に「クリシーの静かな日々」というのがあった。中学時代ドキドキしながら読んだ…いや、そんなエロ小説の世界ではなく(笑)。

「そろそろ起きるか」と好きな時間に起き、バイクで海まで走ったり、図書館で読みたい本を探し、録りためた映画を観たりしているうちに、「さて、今晩は何を食べよう」とレシピに頭を巡らす時間が来る。材料を買い出し、夜、作った料理をカミさんと囲みながらついつい飲み過ぎて、YouTubeやお気に入りのドラマを観ているうちにウトウト眠りに落ちる…そんな日々のルーティン。

なんと、うらやましい限りではないか、と思う方もおられるかも知れない。好きなことができて、しかも負担にならない仕事まである。

古代ローマの哲学者、セネカは「ローマ人にとって重職に就くのは名誉だが、理想の生き方は、重職から解放されて自分の時間、思索と内省の日々を持つこと」と説いた。

鳥取県の片山前知事が中学時代に愛読したのは(私のようなエロ小説ではなく)セネカだった。「権力はバトンリレーと同じ。受け取ったら全力で走るが、次の走者にはすみやかに手渡す」と知事室で語った通り、大方の予想に反して2期であっさり退任し、大学教授になった。彼は「理想の生き方」を手に入れたのだろうか。

ところがこの静かで平穏な日々が、実は私には居心地が悪くてしょうがないのだ。

「まさか」の世界

なぜだろう、と自分でも考える。生活は豊かではないが

苦しくもなく、人とのストレスもほとんどない。「老後が大変な人もいるのに、何を言っているのだ」とお叱りを受けるかも知れない。

思い当たるとすれば、何か暗いもの、不気味なものが向こうから少しずつやって来ている予感、それに対してなすすべもなく、日々の平穏な暮らしに埋没していることへの焦りと後ろめたさが、心の奥底にある。

まさか21世紀にもなって、これほど世界が変容するとは予想もしていなかった。冷戦の壁がなくなり、世界のどこへでも自由に旅ができ、再び日本が戦争の不安におびえることなどないだろう、と勝手に思っていた。

思い違いだった。プーチンによるウクライナ侵攻（2022年）、強引に3期目に就任し、独裁と監視国家を築いた習近平（22年）、ナチスのゲットー襲撃を思わせるイスラエルのガザ攻撃（23年）、復活したトランプ（25年）による国際法無視のベネズエラやイランへの攻撃（26年）、そして世界を襲う毎年の異常気象。退職して5年半、自宅で「ワイドショー・ウォッチャー」になった私の目の前で次々起きる「まさか」の世界。

世界は、あれよあれよという間に危険と抑圧に満ちたものに様変わりした。

「まことに申し訳ない」

日本も大きく変容した。「何だかおかしい」と感じ始めたのは、ネットやSNSが絡んだ〝石丸・斎藤現象〟あたりからだろうか。思えば、気づくのが遅すぎた。

どうも「民意」が、私たちが従来考えていたものとは違ってきた。SNSで増幅されたそれらは、私も属していた新聞報道をオールド・メディア、「既得権者の一部」と決めつけ、牙をむき始めた。悲しいことにその主体は、善意に動かされた普通の市民たちなのだが。

分断と憎悪の中で「まさか」の高市政権も生まれた。あの台湾有事の国会答弁ひとつで、最大の貿易相手国である中国との仲は険悪となり、軍備増強も叫ばれている。けれども、いずれ高市の積極財政は破綻をきたすに違いない。その時初めて人々は「選択を誤った」と気づく。

そんな一進一退の攻防を、この平穏な日々から指をくわえて見ているしかないのか。9月には3人目の孫が生まれる。喜ばしいことだが、戦争の影におびえ、国は借金だらけ、地球温暖化で灼熱と化したこの世界に小さな命を迎えなければならない。「まことに申し訳ない」とジイジは深くこうべを垂れる。

高梁にて。

板野　円香
（薬剤師・岡山県在住）

コラムを書くときは、「高梁市図書館」に行く。勿論、その日の都合で叶わないこともあるが、ほぼ例外なくそこへ向かう。それも片道一時間かけて。今日だってそう。

高梁市図書館は、ＪＲ備中高梁駅に直結した図書館兼書店であり、珈琲片手に読書を楽しむことが出来る夢のような施設である。閲覧席も豊富だ。外の風を感じられるテラス席、大きな机の司書スペース、一人で静かに過ごせるソファ席など、その日の気分で居場所が選択出来る。東側の窓に面した電源付きＡＶ席、その一番左が私の愛用席だ。

―冷たいソイラテが体に染みる、夏はこれに限るな

館内にはスターバックスも併設されている。私はもともとスターバックスとは疎遠で、年に一度行けば良い方だった。それが今では執筆という行為の中に組み込まれ、月に一度は行くようになったので、目覚ましい成長と言える(？)。しかし、甘い飲み物は苦手なので、無糖の「アメリカーノ」か「ソイラテ」の二択で回しており、スタバレベルは一向に上がっていない。

―窓の外、犬を連れて散歩している人の姿が見える

何故、「移動」という手順を踏む必要があったのだろう。来ておいて何だが、わざわざ一時間もかけて来なくても、家には机もパソコンもある。文章を書くという目的だけを考えれば、ずいぶん非効率な行為にも思える。

環境心理学には、「行動セッティング理論」(Behavior Setting Theory)という考え方がある。心理学者ロジャー・バーカーらの研究をもとにした理論で、人間の行動をその人の性格や能力だけから捉えるのではなく、「どのような場所で、どのような時間に、どのような活動が行われているか」という環境との組み合わせから捉えるものだ。近年のレビューでは、行動セッティング理論は、物理的・時間的な環境と、そこで行われる行動が相互に結びついた単位として整理されている。例えば図書館。そこでは「読む」「調べる」「考える」「書く」といった行為が起こりやすいように、机や椅子、照明、人との距離、利用のルールなどが組み合わされている。

また、私の「執筆のための移動」には「ゾーニング」という考え方も関与しているように思う。ゾーニングとは、「この場所ではこの作業をする」と空間に意味付けをすることで行動を切り替えやすくする、というものである。机は学習、ソ

ファは読書、ベッドは寝る場所といった具合だ。このゾーニング、「やることを決める」のと同じくらい「やらないことを決める」ことが重要とされる。私の立場で言えば、それは「生活者との区別」かもしれない。家では生活者としての自分、職場では薬剤師としての自分、そして高梁の図書館では文章を書く人間としての自分がいる。完全に区分けしている訳ではないが、一人の人間の中には幾つもの役割や関心事が同時に存在する。それらを全て同じ場所に重ねてしまうのではなく、あえて空間的に分けることで、それぞれの領域を保つことが出来るのではないか。私にとってのゾーニングは、作業効率化のためだけではなく、自分の中にある複数の領域を、空間によって保持し易くするための一つの手法なのだと思う。

―「日が傾いてきましたのでブラインドを調整します」

先ほどの行動セッティング理論には、シノモルフィー(synomorphy)という考え方がある。行動とその行動を取り巻く物理的・社会的な環境が、互いに適合している状態を指すものだ。高梁市図書館に来て書く、という行為を繰り返すことで、そこが「書く場所」へと定着する。AV席でパソコンを開くこと、それ以前にスタバで珈琲を購入すること、もっと言えば其処に至る川沿いの道のりまでが、いつの間にか「書く」という行為と地続きになっている。そんなことを考えていると、奈良県の「ルチャ・リブロ」のことを思い出す。

「ルチャ・リブロ」とは、青木真兵さんご夫妻が運営する、山奥の私設図書館である。そこへ行くにはある程度の時間と手間がかかるので、おいそれとは通えない。しかしそこが魅力なのだ。青木さんは自身の図書館を「彼岸」と形容する。それは、市内から離れ山の中を通り、さらに橋を渡った場所にあることと、現代社会の価値観(此岸)と距離を置くこと、二つの意味合いが込められている。現代社会における資本や消費と真っ向から戦う、そのような場所が必要と考えたのだ。人生を通じた実験ともいえる。そういった要素を確固たるものにするために、ある程度離れた場所が必要であったし、訪問者が「彼岸」に向かうための心の準備、それに呼応するような景観変化のグラデーションが不可欠だったのではないか。

―外には楽しそうに談笑しながら下校する女学生ら

すっかりぬるくなってしまったラテを飲み干し、私も帰路につくこととする。別の役割を保つために、離れた場所、そこに至るまでの変化のグラデーションが必要なのだ。思案中のプロジェクトを片隅に、倉敷へと車を走らせる。

納車

おぎはら きえ　（蔭山）

「…では保証やメンテナンスの説明については以上です。次に、うちのメーカーのアプリをインストールしていただけますか。この QR コードを読み込んでください」
「はい、えーと、はい、インストールしました（今どこも自社のアプリ作るよな～。しかし何に使うんだ？）」
「はい、ありがとうございます。お待たせしました、お車にご案内します。…あちらです」
「わー！　きれい！やっぱり新車は輝いてますね」
「昨日洗車もしました。傷などがないかご確認ください」
「…傷はないですけど…、あの、このバンパーに付いてるのコーナーセンサーですよね。私、頼んでないですけど」
「ええ、今コーナーセンサーは標準装備なんですよ。昔はオプションでしたけどね」
「えー、そうなんですかぁ…。別にいらないのになぁ。前の車でも付けなかったのに。センサー無い方が、バンパーがすっきりして格好いいのに」
「安全装備は次々標準化されていますよ。ご説明しますので運転席にお乗りください。エンジンをかけてください」
「はい」
「シフトをバックに入れてください。はい、モニターにバックカメラの映像が映ります。パーキングに戻して、今度はこのボタンを押してみてください」
「はい」
「そうすると今度はモニターにフロントカメラの映像が映ります。基本的にこのボタンを押さないとフロントの映像は出ないですけど、本当にぶつかりそうなときは自動で画面が切り替わります。だから勝手にフロントの画像が現れたときは相当やばいときです」
「へえー（別にいらない…）」
「SOS ボタンはここにあります」
「SOS ボタン～？」
「はい、事故などの緊急時にはこのボタンを押すとオペレーターにつながり、通話できます。車に内蔵されている GPS で場所も特定できますので、不慣れな土地でも緊急車両の手配や修理にかけつけれます」
「ほぉ（じゃあ JAF いらんのでは？）」
「あとエアバックが作動した時も自動的につながります。オペレーターの呼びかけにドライバーが応えれなくても緊急車両の手配をします。GPS は車内部に堅牢に設置されて

いますので、事故の衝撃で壊れることはありません」
「ほほぉ（ていうかGPSついてるの？　カーナビ入れてないのに？）」
「車の通信を開通しますので、先ほどスマホに入れていただいたアプリを開いてください」
「はい（車の通信…？）」
「ログインして…、そこで車種を選択して…、「次へ」を押して…、「送信」を押して…、はい、車のモニターに認証番号が表示されましたね。これを入力してください」
「はい、入れました（何がはじまるんだ…）」
「はい、これでこの車の登録ができました。これでスマホから車の状態を確認できますよ。燃料の残量とかも、ここに表示されますよ」
「へー、すごーい（いるか…？）」

新しく買った車は前の車と同車種で、運転席の高さとか座り心地も変わらず、代車で乗っていたハイブリッドの軽自動車もなかなか良く走って感心したけれど、「うん、やっぱりこれだよな」とやっとホームに戻ったような感じがして、ほっとした。しかし、諸々説明を受けて、スマホにアプリも入れて、車を買ったというより、走るでっかい通信機器を買ったような、なにか釈然としない部分もあった。安全装備と言いながら、これは本当は監視システムなのかもしれない。ジョージ・オーウェルの小説『一九八四年』（早川書房）に出てくるテレスクリーンが思い出された。

テレスクリーンとは、各家の壁に嵌め込まれている装置で、国からの広報などの発信と、室内の音の受信を同時に行う。さらにこの装置は、居住者の行動も捕捉する。いつ見られているのか、いないのかは知る術はなく「かれら」はいつでも好きなときに接続できる。

私がこう走りながらも「かれら」は気まぐれにこちらの位置を眺めたりしているのかもしれない。そして、通ったルートや立ち寄った店の情報は収集され分析され、ゆくゆくは政府に引き渡され……。

家に帰って台所で麦茶を入れて一息つくと、スマホから通知音がした。さっきディーラーで入れたアプリになにか通知がきている。

「車のドアがロックされておりません」

私は〈ビッグ・ブラザー〉の監視下に置かれている。

（著作）おぎはら きえ『迷妄蒙昧』陰山　2025

イギリス留学記　12

振り出しに戻る

三浦　永理
（三十一歳・女性）

八月、修士論文を書くことに追われていた。結局帰ってきてから、体調をだらだら崩してしまったり、日本の学会で発表したりしていたら、八月の終わりに近づき、私は鳥取への飛行機に乗っていた。東京で新たな職場で教員に戻るので、その前にというところだった。空港に着いて、やっと帰国して初めて帰ってきたという気持ちになった。

前の職場だった学校は、一年しか経っていないものの、子どもたちは変化していた。背が伸びて少し大人びていたり、自分の目標に向かって行ったり、確実に成長している。対して、同僚だった大人の側は、ほとんど変わらない。私も明日からこの学校に職場復帰するような予感すらしてしまった。というのは恐ろしい。

そう考えると、私はこの一年間で何か変化があったのだろうか。

外面的な変化は多くあった。長年夢を見ていたイギリスで暮らした。大学院に行った。大切な人に大切にしてもらった。だが、中身の変化はそこまで大きくは見えないだろう。結局教員に戻っているではないか、英語を教える仕事に戻っているではないか、と。

この一年間、「留学ディスコース」にめまいを起こしていた。留学に行けば人生が変わること、自分の思うような人生を歩めるようになること、そんな夢を語っていたり、それを journey(旅)と形容したり。そんな夢を他の人にも体験してほしいから、応援したいから、記事にする。そんな文章を見るたびに、無責任なこと言うなよと思っていた。かく言う私もその一員ではあり、一応 note で記事を書いていた。

イギリスに行ってよかったとも思う。けれど、最後に友人たちと振り返り会として、ZINE 作りをしている時に雑誌の中のこんな言葉が目に入ってきた。

「If you have a great year, it's temping to say, 'We did all of these things well.' And I'm saying, maybe, maybe not.(もし素晴らしい一年を過ごしたら、「自分たちはすべてうまくやった」と言いたくなるだろう。そして、私は、多分そうだし、そうではないかもと言う。)」

正直、この一年、そこまで意識高く、全ての集まりに参加

していたわけではない。自分ひとりになってしまうと人脈作りにそこまで勤しまなかった。これから何をどの団体に属してやるかも決めていない。前、職場で名刺を持っていた時の方が、自分が何をやるかを次に何やるかをどんどん降ってくるタスクとして、それに乗せる自分の思いとして、考えることができた。

まっさらな自分として何をしたいだろうか。

こうやって文章を書くことは好きなものの、これで「稼ぐ」となって肩肘を張り始めた瞬間、私は「売れるようなディスコース」に巻き込まれてしまうと思う。知名度を上げなければ、売らなければ。そうなったときに、「英語をやりさえすれば未来が開ける」「マルチリンガルで広がる将来」などと言ってしまいそうだ。それだけは、絶対にやりたくない。やりたくないことだけは、出てきてしまった。

そう考えると、私にとって、鳥取の五年間の方が、ロンドンの一年間の何倍も人生を変えるような時間だったのだと思う。今回は、その時に声をかけてもらって寄稿した『トリノコバナシ』を汽水空港で受け取った。それは鳥取で暮らす十人の女性の生活についてまとめたリソグラフ印刷のZINEで、私は鳥取から出た身にも関わらず書かせてもらったのである。それを帰り道に読みながら、その時に知り合った人たちにいまだにいろいろなことを教わっていると改めて感じた。そこで学んだことを英語で語り直すこと、その作業をわざわざお金と時間をかけてやったのが、ロンドンでの時間だったのかもしれない。

私が学んだ異文化コミュニケーションは、「多国籍企業におけるスムーズなコミュニケーション」「多文化共生のための異文化理解」のようなものを単純に志向しない。そんな中立なコミュニケーションはあり得るのか?誰にとってスムーズなのか?文化とは何か?それを批判的に分析していく。それは他の人からみたこの学問のイメージとギャップがあると思う。理想を感じていた異文化理解・他者理解の世界は、崩れてしまった。私は振り出しに戻った。

だから、私はこの一年を振り返ることを今すぐにはできないと感じている。いつかこの一年の意味が繋がってくることがあるだろう。だけれど、私はそれを他人に語らせはしない。社会に語らせはしない。お前らのディスコースに乗る気はさらさらないのだ、世界。

たまたま参加した定有堂の読む会は『バラバラな世界で共に生きる　リチャード・ローティの哲学』だった。私もまだその問いの中を生きている。

イーハトーブ

堀内 菜摘
（秋田市在住）

ひまわりに入道雲、トウモロコシ畑。これぞ夏！な風景に心が躍った。岩手県雫石町にある小岩井農場。馬に乗ったり、羊を観察したり、暑さで溶けないように急いでアイスクリームを食べたり。そんな明るく活発な2日前とは打って変わって、暗く淀んだ気持ちで東京の町を歩いていた。

最近、物思いにふけることがある。ああ、人生どうなるんだろう。これほどまでに仕事に一生懸命になっていると、結婚とかするのかな、できるのかな。このままだったら、このままだったら…。こうなったら思考は止まらない。私は何がしたいのだろう、何をしなければならないのだろう。どこで生きていくのだろう、誰と生きていくのだろう。ぐるぐる考えながら、一人、六本木の町を歩いた。ビル群を眺めることなく、地べたを見て。

今年の初夏は、政治をテーマにしたドラマ「銀河の一票」にハマった。選挙をめぐって展開される人間模様だけでなく、ドラマの随所にちりばめられた宮沢賢治の言葉や世界観に魅了された。「もっと宮沢賢治を知りたい」と、小岩井農場に行った翌日は、花巻市にある宮沢賢治記念館を訪れた。

記念館には、ドラマで何度も唱えられていた「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」の引用元である「農民芸術概論綱要」が展示されていた。「ずいぶん忙しく仕事もつらい」、「もっと明るく生き生きと生活する道を見付けたい」と思う農民の思いに自分が重なる。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあ

り得ない」には続く言葉があり、「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」とつながる。「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」との宮沢賢治の助言を反芻しながら、六本木の地べたを見て、また歩いた。

　すると急に目の前がキラッと光った。ガラスの破片が入ったアスファルトだ。東北では見かけたことのない、近未来的なアスファルト。東京は、地べたにも銀河があるとは、流石だなぁ。そう感嘆して、ふと空を見上げると、ビルの谷間から東京タワーが顔を出していた。地べたを見続けていたら気づかなかった。東北のように、空いっぱいの星は見えないけれど、たくさんの人の営みが感じられる。これもまた美しい。

　宮沢賢治も、花巻から上京して、そんなことを考えたりしたのだろうか。

　環境のせいにしてはいけないな。明るい未来は自分で作っていかないと。タイミング良くキラキラのアスファルトを見つけるだなんて、ドラマ仕立てすぎるだろうか。だが、その偶然さが自分らしくて、「ふふっ」と声に出して笑った。笑ったら、心が少し救われたような気がした。

本を作る側から（42）

村瀬 謙介
（小取舎）

九月刊行の本が三冊。一七〇ページの本と、五五五ページの本と、一三〇ページの本。これをほぼ同時進行で制作している。もちろん仕事はそれだけではない。

海へ行きたかった。海へ行って、まるで露天風呂のようにチャポンと使ってぼーっとしたかった。が、そんな暇はない。突然の依頼や打ち合わせに空けておく時間も用意しているがあっという間に埋まってしまう。今年の夏はそんな自分を「まだ楽しめるぜ」と元気付けるように盆を過ぎても長いこと暑くしてくれているが、暇のない自分にはただただ暑いだけなので体力を奪われる。暇な時間ができたらできたで積読の本を読んだり、人と会って話をする方が有意義なのだが、一人で考える時間も必要だ。

八月に閉店する本屋さんが三店。小取舎の本もたくさん売ってくれた喜久屋書店国府店が八月一九日に閉店した。ここは直アポで営業し、小取舎の本を置いてくれた書店の一つ。あれは二〇二一年一月で、吉田幹男著『鳥取力のかたち2030』からなので気付けば四年半の付き合いになっていた。書店員さんのSNS発信力も尋常じゃなく、一日に二、三度投稿していたこともザラで、投稿量は県内随一だったのではなかろうか。喜久屋書店国府店がなくなり、鳥取県から喜久屋書店が消える。最終日に在庫の受け取りと精算を兼ねて伺い、活字文化がテーマの回のおでん塾にも来ていただいた店長さんとお話し、最後に店内を回って本を物色。店の一番奥、角の棚の端から学研の絵言葉図鑑と、レジ前にあった今年六月初版の堀田昌寛著の新書『無とは何か』を購入。これ以上ここにいては泣きそうになってしまうので会計してそそくさと出ようとするが、お店の入り口にあった子ども用の低いテーブルと椅子が目に入る。ああ、ここで息子と絵本を読んだなぁとしんみりした。一度も参加したことはなかったが、読み聞かせのイベントも結構されていたのを思い出した。近辺に住む方はもっと思い出があって寂しいだろうな。

そして喜久屋書店国府店が閉店した次の日、八月二〇日に今井書店倉吉店が閉店した。同じ倉吉市にあるパープルタウン店と統合するとのことだったが、二一日に倉吉に仕事

で行った際、パープルタウン店に寄ってみたが統合した気配はない。むしろ以前より書棚が少なくなっている？

流石にまだ閉店翌日なので店内整理しているのだろう。元々私はパープルタウン店の方によく行っているので拡充されると嬉しい。

そしてもう一店舗。八月三一日で閉店するヴィレッジヴァンガードイオンモール鳥取北店。名古屋本社のこのお店は「遊べる本屋」をテーマに、本だけではなくCDや雑貨など色々なものが売られている。今では本以外のものを売る書店は珍しくないが、創業時の一九八六年にはかなり革新的だった。私が大阪に出てすぐの二〇〇〇年にアメ村店がオープン。場所は三角公園に隣接するビルで、交番横のエスカレーターで上がったところにあった。サブカル大好きな村瀬青年はマニアックなコミックや本（『バトル・ロワイヤル』）、ソファー、スケートボードなど買った記憶がある。関西人スタッフのレベルの高い（？）笑えるポップ目当てに店内を回るだけでも楽しかった。その後アメ村店は移転し、コロナ禍の二〇二二年に閉店した。現在大阪には十一店舗残っている。鳥取県には米子と日吉津の二店のみとなる。

大阪戎橋のTSUTAYAも来年一月に閉店が決まった。二〇〇三年にオープンし、「一階にスタバが入っているんだってよ！」と友達と驚いて、その後演劇のDVDを買いによく行っていた。本屋×〇〇という形態でもうまくいかなくなってきているのか。最近都会では入場料がある本屋や本が主役ではない本屋が増えてきているように感じる。競争が多い都会ならではなのだが、この鳥取でもそのような本屋があっても良いかもしれない。つまり本屋×〇〇ではなくて、〇〇×本屋。出版社としても本があるスペースが多い方がありがたい。

小取舎の最新刊

『猫風閣主人のひとりごと』
坂本修一　著
本体　一一〇〇円
発行　2026.6

論語について（16）

小原　修治
（県立高校教諭
湯梨浜町松崎在住）

子曰、徳不孤、必有隣。（里仁篇第四・第二十五章）

子〔し〕曰〔い〕はく、徳は孤ならず、必ず隣有り。

この章句は普通、「徳」を有徳者と見て、有徳者は孤立せず、必ず仲間がいるという意味で理解されている。が、「徳」を概念語と考えれば、「徳」は一人では成り立たず、必ず相手がいて成り立つという意味になるだろう。以下、この解釈を念頭に、「徳」の語の意味について論じたい。

「徳」の語の起源は、その字形の類似性から、甲骨金文に見える「省」の語だとされる。が、甲骨金文の「省」には後世の「徳」の意味は無く、①巡視、②田猟、③征伐の三種類の意味があるとされる。とはいえ、この語の意味を『古典新義』所収の論文でこのように整理した聞一多は、それらが一連の行為を多元的に捉えたもので、一元的に考えれば、いずれも為政者が祭祀儀礼を執り行なうために統治する土地へ赴くことを意味することを看破していた。「省」には「彳（ぎょう にんべん）」が付くものがあるが、それはこれが交通や行動に関わる意味の語だからである。「徳」に「彳」が付く理由も、実はこの点に由来しよう。

一方、孔子が生きた春秋時代以降の戦国時代から漢代の初期にかけての文献にも、後世とは異なる意味の「徳」の用例が見られる。増淵龍夫によれば、『史記』列伝などに見える「徳」の語にはきわめて具体的な行為に即した恩恵の授受を意味するものがあり、施した者と施される者との間に心情上の結びつきを生む作用を持っていた。こうした「徳」の作用は、春秋時代以前の氏族制の社会においても支配秩序を維持する上で意味を持っていたが、氏族制崩壊とともに多くの下層の士がばらばらになる春秋時代以降の社会において新しい歴史的意味を持つに至ったとして、遊侠列伝に見える「鄙人曰〔い〕はく、何ぞ仁義を知らん、己〔おの〕れ其〔そ〕の利を嚮〔う〕くる者を徳有りと為す」の語を挙げる。当時の庶民（「鄙人」）にとって「徳」の語は新たに「仁義」とは無関係な「利」の授受の意味を持つに至ったと言うのである（『中国古代の社会と国家』）。

以上のように、歴史的に大きく異なるかに見える「徳」の

意味に一貫して見られる要素とは何だろうか。思うに、それは交換の概念である。増淵龍夫が指摘した、戦国時代から漢代初期にかけての文献に見える「徳」の語に交換の概念が見られることは言を俟たない。右に述べたように、そこには施す者と施される者との関係が認められるからである。が、実は「徳」の語の起源とされる甲骨金文の「省」の語にも、後述するように、為政者と被為政者との間に一種の交換関係が認められるのである。このことは戦国時代から秦の統一を経て漢代へ向かう段階で発生した秩序崩壊が為政者と被為政者との間に成り立っていた祭祀儀礼的な「徳」を崩壊させるとともに、増淵龍夫が唱えるように、新たに一個人と一個人との間に成り立つ相互扶助的な「徳」を重視する傾向を生じさせたことを物語るだろう。

「徳」の起源である甲骨金文の「省」の意味に為政者と被為政者との間の或る種の交換関係が認められることは、次のように説明出来る。①の巡視は、古代日本の「国見」のように、為政者が郊外へ赴いて行なう祭祀儀礼であり、その場では共同飲食も催された。それ故、被為政者からの産物の貢納、それに対する為政者からの褒賞も行なわれたと考えられる。この点、②の田猟についても同様である。田猟とは大規模な狩猟採集の祭祀儀礼だが、そこに於いても貢納と褒賞という形態の交換が行なわれたはずである。とはいえ、③の征伐については、なぜそれが交換なのか、分かりにくい。そこで、この点も含め、これまでの議論を柄谷行人の交換様式論を用いて整理し、結論を述べたい。

柄谷は、世界史は交換様式により解明出来ると考えた。A＝互酬（贈与と返礼）、B＝服従と保護（略取と再分配）、C＝商品交換（貨幣と商品）、D＝Aの高次元での回復である無償の贈与の四つの交換様式がそれだが、その上で、Aはネーション（共同体）を、Bはステイト（国家）を、Cは資本経済を、Dは普遍宗教をそれぞれ生んだと見る。思うに、このうち「徳」の語の起源とされる「省」の語は、Bの服従と保護（略取と再分配）を意味する。先に述べた貢納と褒賞は、略取と再分配と言い換えられるし、服従と保護を交換関係と捉える視点からは、征伐を交換とみなすことが可能だからである。一方、本章および遊侠列伝などに見える「徳」の語は、いずれもAの互酬（贈与と返礼）を意味する。但し、本章も含め、孔子が説く「徳」の語は、いずれもAの高次元での回復であるDを意味すると見ることも出来る。「仁」が無償の贈与であり、孔子の教えが普遍宗教であるならば、むしろそう見るのが適当である。

67（シクスティセブン）

古賀　啓三
（米国ミシガン州在住）

運転しながら、ラジオを聴いていたら、映画のディレクターと思しき人物がインタビューされており、新しい作品の登場人物Xはあなたの Proxy だと思いましたが、という質問に、笑いながら、そうです、と答えていた。

Proxy のこういう使い方は珍しいな、と思った。Proxy war というと、代理戦争で、Proxy は代理、なのだが、英語が母国語の妻に聞いても、Is X you? 作中のXはあなたですか？ みたいな直截な言い方が、こういう場合フツーなんじゃない、とのこと。僕もそう思った。

僕は、小説を実作する者が他者の作品や、小説一般について語るとき、常に自分が今いるところ、現時点での興味に照らし合わせて、でしか語れない、と思っているので、僕自身が現在書き上げつつある作品をベースに考えてみたい。この小説は全六章から成っているが、各章立てが「紺野遥香」「高見沢聖子」「Samuel Lee（サム・リー）」「佐野響子」「紺野幸男」「花城辰巳」と、登場人物の名前になっている。

僕はこの作品で、現実に近い混沌を書きたかった。つながりのない人生や事件が偏在している、という「現実」。その混沌が、何かしらの偶然で有機的につながってゆくこともある、というリアリティに近づきたい。運命的、ドラマチックな出会い、みたいのは排除しながら。

そういう方向、というか、手法にかかずらわっているとき、一人の登場人物への思い入れ、もしくは「主人公」というノーションは考えにくいのだが、いつものように、口さがない（かつ正直な）友人に読ませれば、そりゃ、ど助平で、自己中のサムがおまえに決まってる、というに相違ない。このところ、僕が、小説を書く、ということに対して、肌感覚的に感じているのは、作品は僕の理性によってではなく、僕という総体から「分泌」されている、という体感、直感である。ゆえにサムも、高見沢聖子も、花城辰巳も全て僕の分泌物、僕、なんである。彼らが体験する事象、感情も全て、僕の中に累積された体験や感情に培養され、生成された分泌物である。彼らの置かれる状況もまた然り。すると、どの登場人物があなたの Proxy ですか、などという質問は無意味、というか答えは聞かずとも明らかで、作品の総体が「わたし」、ということになる。

自分が爺いになったこともあり、きちんとした「老人小説」がそろそろ書かれてもいいな、誰か書いてくれないか

な、と常々思っている。村上春樹の作品に出てくる老人は老賢人みたいなのばかりで、もっとリアルな市井の年寄りを読みたい。谷崎の『鍵』や、『瘋癲老人日記』、川端の『眠れる美女』など、面白い。『瘋癲』は、理不尽にからだが壊れてゆく様子や、いやに薬に詳しい老人がリアルで面白い。松本清張にも『老春』という作品があるらしいが未読。これは七十八歳の老人の二十二歳の家政婦に対するオブセッションが主題らしい。どうも老人を書くと性への執着のことばかり。川端の『眠れる美女』は、少女のような女たち、睡眠薬で眠らされた娘たちとの「添い寝」がウリの秘密クラブの話。しかし、「安心のできる」域に達した男でしか会員になれない。

谷崎は自身が七十五歳で、瘋癲老人「督助」七十七歳を、川端は六十一歳で、『美女』主人公江口六十七歳を書いた。

書きかけの作品中、サムはアメリカ人で、国務省役人、つまり外交官。なんだけど、大学、大学院ではジャーナリズム、Japanese Studies を専攻した日本語ペラペラの日本スペシャリストで、今回のアサインメントでは、日本のアメリカ大使館が発行するプロパガンダ広報誌のチーフ・エディター。若い日本人の女の漁色が趣味。彼が Joe Shuto(首藤護)という日系画家兼評論家を、日本滞在中の拠点としている、古い武家屋敷を改造したスタジオにインタビューにゆく。その準備として、首藤に関する Wikipedia を斜め読みし、画家兼批評家の六十七歳という年齢に強く反応する。学院生時代、近代日本文学のクラスで読んだ『眠れる美女』の主人公が六十七歳で、二十三歳のサムは、自分も六十七になったら「安心できる男」になっているのだろうか、などと思いを巡らせたことを思い出す。

義父が東京の米国大使館が発行する広報誌の編集主幹で、義母は日本人。義母以外の日本人女性も嫌いではなかったようだ。義父はもう十数年前に他界しており、義母も九十二歳で認知気味なので、僕のこの日本語の文章を読める血縁は妻だけだが、このような雑文には無関心であることを祈る。首藤六十七歳は章立ての題名にもならないキャラクターだが、章間に縦横無尽に偏在し、物語を動かしてゆくトリックスターかもしれない。書き了えた直後は、いつも座りの悪いような気持ちになるが、今回はいつも以上になんだかよくわからないものを書いてしまったような気がしている。前言を翻すようだが、作品の総体が「わたし」ではあるが、ディテールに分泌の濃淡はありそうだ。作品のタイトルは『67(シクスティセブン)』。

人形愛…ふたたび

ムラカミヒロミ
（フライングブックマン）

先月、わらべ館（鳥取童謡・おもちゃ館）で「怪しき奇しきものたち」展を見た（会期終了）。博物館の「妖怪・幻獣づくし」展のコラボレーション企画である。

エントランス・スペースでの小規模展示ではあったが、なかなか工夫された、見応えのある展示だった。

入口の取っ付きに「オバケのQ太郎」グッズが並んでいたのには笑ったが、絶えて意識したことがなかったものの、そうか、奴は「お化け」だったのだな。確かに、初期のQ太郎は、五等身くらいで、白い服（あの外被は服なのですよ）もダブダブしていて、外国の絵本や、「ブーフーウー」に出て来る幽霊に近いものがあった（毛も四本以上あった）。

それはさて置き、壁の色どりに、人形や玩具の写真がペタペタと貼ってあったのだが、中に、四谷シモンの人形があった。はて、この種のものは当節、著作権がうるさい筈だが、と思いながら回っていると、何と、実物があるではないですか。「少年」像が。

よもや、鳥取でシモン人形にお目にかかれるとは思いも寄らなかった。聞けば、館蔵品という。安くはなかったろうに、と思うが、まあタワシの箱に何億円も払うよりは、余程気が利いている。見識というものであろう。

「少年」シリーズには、様々なタイプがあって、機械仕掛けバージョン、解剖バージョン、蝶ネクタイの正装バージョン。同館の所蔵はサファリ・ジャケット風の夏服バージョンだが、これにも何種類かあるようで、今まで図版では見たことのないタイプであった。

一体に、シモンの人形は、テーマ的には結構露骨なものであるにも拘わらず、不思議にエロスを感じさせない。リアルなようで、生身を感じない。

「こういうものをつくっていると、目的も何もないんですもの。」「何か意味ありげだとか、本当に意味があるとつまらないですね。人形そのもの、まるごと一〇〇％人形でないと。」（「ピグマリオニズム～人形の形而上学をめぐって」）

その隣には、「少年」と同サイズの市松人形が飾られてい

た。他に小サイズのものが二点と、山岸涼子の「わたしの人形はよい人形」が一緒に並べてあった。何で、こんなことするの！（一体の市松人形を巡り、母娘二代にわたって起きる奇怪な出来事と、人形の本質にまつわる因縁話である。この人の描く怖いシーンは本当にコワい）。

「陰翳礼讃」ではないけれど、ただでさえ薄暗い日本家屋の奥の間に、こんなのが立っていたら、キャッと叫んで腰を抜かすに違いない。人ならぬもの、人智の及ばぬものの存在を嫌でも感じることだろう。

よしんば、灯りがあったとて、明と暗のコントラストが一層際立ち、影は益々暗く、闇は愈々深まるばかり。

人形の起源は、呪いの道具であった筈で、雛も這子（ほうこ）も、皆その延長上にある。人形を畏怖するのは、民族の記憶ではあるまいか。

山田徳兵衛の『日本人形史』によれば、市松人形は「裸人形」「三つ折れ人形」とも呼ばれていた。前者は、着せ替え人形の謂であり、後者は手足、腰の折り曲げが可能であった（ポーズが自在になり、着物の着脱が容易にできる）ことを表している。屈曲部は、椀を重ねたような形であったというから、ここから球体関節までは指呼の距離。

シモンは、ハンス・ベルメールに触発されて、球体関節人形を試行錯誤の上で作り上げた訳だが、既に江戸時代にその原型は出来ていたのである。

『近世風俗志』（守貞謾稿）には、市松人形の作り方が細かく説明されている（巻之二十六）。粗（並製）は大鋸屑を膠で練ったものを型に詰め、精（上製）は木彫りであった。共に、仕上げは胡粉を塗り、光沢を出すために鶏卵を混ぜた。肌の色も、白から肉色へとリアル指向となり、髪は糸か人毛。精は瞳にガラスを用いることもあり、着物には紋を入れ、脇差、扇子、巾着から、布団、蚊帳に至るまで誂えたという。

シモン人形も、素材・制作方法は、日本人形の伝統を受け継いでおり、そこまで考えて、市松人形と並べて展示したのだとすれば、わらべ館のキュレーターも侮り難い。

ライブ

あきの素生
（くうねるめがね）

演劇を観る機会がちょこちょこある。といいつつ、この「演劇」ということばが、正確には何を意味しているのか、類似する事柄のうち、どの範囲までを指しているのか、はっきりとはわかっていなかった。それで、この度調べてみたら、「観客を前に、俳優が舞台で身ぶりやせりふで物語や人物などを形象化し、演じて見せる芸術。舞台装置・照明・音楽など視覚・聴覚上の効果を伴う総合芸術。芝居。劇。」（デジタル大辞泉）、「俳優が、舞台の上で、脚本に従って、体の動きとことばを通して表現する芸術。多くは、舞台装置、照明、音楽などの補助的要素を必要とする。劇。芝居。ドラマ。演戯。」（精選版 日本国語大辞典）となっていて、自分が言わんとする「舞台のお芝居」をずばり指し示すことばなのだとわかり、すっきりした。

高校の文化祭、クラスの出し物は演劇だった。演劇部のクラスメイトが脚本を書き、教室に舞台を設えた。自分は裏方だったこと以外、具体的に何をしたのか覚えていないが、出演するクラスメイトの台詞の練習に少しだけ付き合った。台詞を言うのは気恥ずかしかった。でも、それを乗り越えたところに楽しさがあるような予感がした。

大学に入り、サークルなどを見て回る中で、演劇部の舞台を観る機会があった。あのとき感じた予感が、どこかにひっかかっていた。舞台はおもしろく、コミカルできびきびとした動きや台詞まわしに魅せられた。にもかかわらず、舞台に続いて行われた入部案内で、練習時間や授業に出ずに部活をやっているという先輩の武勇伝に恐れをなし、入部を見送った。その程度の気持ちだったのだと言われれば、なるほどそのとおりだと思う。かくして演劇とは、かすかにふれるかふれないかくらいの距離ですれ違っていった。

演劇には縁が薄かったが、たまに活動する合唱部に所属し、大会の課題曲から映画の主題歌までいろんな曲を歌った。特に思い出深いのは、映画「天使にラブソングを」の劇中歌だった。ゴスペルというものを初めて知った。社会人になり、本場のゴスペルが聞いてみたくて、たまたま知った、ニューヨークのストリート文化やタップダンス、ゴスペルなどを取り入れた舞台を観に行った。大きな会場ではなく、有名な人が出るわけでもない。それでもその舞台は、今でも心に残る感動的な舞台だった。とりわけ、最後のゴスペルでは、我々シャイな観客が、シンガーの熱量に圧倒され、立ち

上がり、身体を揺らし、手を打ち鳴らして歌った。シンガーのひとりはタオルで涙を拭った。そのシーンが目に焼き付いている。会場がひとつになるとは、ああいうことをいうのだと思う。

演劇ってなんだろうと考えることがある。演劇論とか、そんな大それたことではなく、映画もテレビドラマも好きだし、おもしろいけど、演劇ならではのよさってなんだろうと考えるのである。

演劇には、制限がある。舞台上の限られたスペースで、物理的に可能な範囲で、様々な事柄を表現する。ひとつの部屋で物語が進行していく場合などの舞台の細かな作り込みもさることながら、いくつもの場所を表すために柱や段差だけで作られた簡素な装置も、その工夫を見るのが楽しい。

ものだけではなくひとも、制限の中で演じている。体が動く範囲で、その範囲を可能な限り広げながら、自分の記憶と声で観客に物語を届ける。リモコンひとつで音量を下げたりできない。その場で生まれる俳優さんたちひとりひとりの声があわさり、圧倒的な迫力で心を揺さぶることもある。純粋に、人間ってすごいなと感じる。

地続きにフィクションがあり、演じる人と観る人の間にコミュニケーションがある。俳優さんが観客に話しかけたりということだけではなく、おかしい台詞に笑ったり、すばらしい演技に拍手を送ったり、そんなコミュニケーションだ。これがライブならではのよさかなと思ったりする。

ゴスペルの舞台を経て、またあんな体験をしてみたいと、コンサートや演劇を観に行くようになった。ずいぶん前になるが、美輪明宏さん主演の「黒蜥蜴」を観る機会があった。会場に入るといい香りがして、非現実の世界に誘われるようだった。舞台は美しく、たまに笑わせて、最後のシーンの美輪さんは光の中で少女のように純真無垢に見えた。舞台終了後、何度目かのカーテンコールで、美輪さんが投げキスをした。その瞬間、ありきたりだが電気が走ったような感覚になった。自分だけかとどぎまぎしたが、一緒に観劇した友人も同じだったようで、二人でどぎまぎしながら帰った。舞台からうんと離れた席だったのだが、美輪さんほどの魅力の持ち主だと、広い会場全体にそれを行き渡らせることができるのだな、とふわふわした頭で考えた。

いつかまた、思いがけない感情がもたらされるかもしれない。もたらしたものはライブで過ぎ去っていくけれども、もたらされたものはきっと消えない。

ご案内

ドラメリア（座敷わらし）

◇

定有堂教室「読む会」（講師　岩田直樹氏）
定有堂教室「ドゥルーズを読む会」
定有堂教室「読書室ビオトープ」
　それぞれ会場は　とりぎん（県民）文化会館
　葉香太極拳クラブ
　会場　麒麟スクエア（市役所二階　水曜夜・土曜昼）

・定有堂教室と太極拳の詳細は
　下記の、QRコード参照
　（@ドラメリア）

『音信不通』紙版の置き場
・県立図書館2階ハンコーナー
・エスキース（倉吉）・森の生活者・邯鄲堂・
・cafe mellow（カフェ メロウ）
・SHEEPSHEEP BOOKS（定有堂ビル2階）
・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

・編集後記…

鳥取市内にこの春オープンしたコミュニティシアター「シネマドア」へ行ってきました。水色の鳥のポスターをあちらこちらで見かけて、気になっていたところ。鑑賞作品は「木挽町のあだ討ち」源孝志監督。謎解き要素は薄かったですが、映像の美しさ、北村一輝の演技力、ケンワタナベのラスボス感（笑）と、見どころ盛り沢山で楽しめました。

帰りに足を伸ばして「SHEEPSHEEP BOOKS」で原作本を買いました。こちらも読みたいと思いつつ、きちんと読めていなかった作品です。よくこの作品から作ったよなあ……と感心。映画ではほとんど見えなかった、登場人物の背景が掘り下げられており、まったく違う良さがあるので、未読の方はぜひ。

ドラメリア（編集長）

三浦永理さんがイギリス留学から帰国。パリの「シェイクスピア・アンド・カンパニー」の絵葉書をいただきました。看板に「見知らぬ人に冷たくするな、変装した天使かもしれない」という文言が現在もあり、感動しました。定有堂ビルの定有堂事務所に額に入れて飾ってあります。

奈良敏行（発行人）